

氏名	ムピンディ・ロナルド・キブデ
ヨミガナ	ムピンディ・ロナルド・キブデ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第478号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 ウガンダ陶芸の改善点～日本における備前焼の伝統を活用したケーススタディ 〈作品〉 ①Pipe Organ form. (パイプオルガンの形) ②Percussion Pots. (打楽器の壺) ③Flute like form. (フルートのような形) ④Longneck Udu form. (長い首を持つウドウの形) ⑤Kalimba form. (カリンバの形) ⑥Drum form (打楽器の形) ⑦String pot. (弦楽器の壺) ⑧String form (koto) (弦楽器の形 (琴)) ⑨Bizen Pot (shaker) (備前焼の壺 (シェーカー)) ⑩String form1.2 (弦楽器の形1・2)

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	島田 文雄
(論文第1副査)	東京藝術大学	准教授	(美術学部)	片山 まび
(作品第1副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	豊福 誠
(副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	篠原 行雄

(論文内容の要旨)

本論文は、筆者の博士課程における研究と作品について論じるものであり、以下の4章から構成される。第I章では研究の背景や調査方法の概要について述べた。第II章では備前の現代作家とウガンダ陶芸の現状、備前の技術をウガンダ陶芸に用いることの有効性を説いた。第III章では学部、修士の作品について概観し、博士の作品と研究にいたるプロセスを論じた。第IV章では博士提出作品について、制作のプロセスとコンセプト等について論じた。

本論文における最大の研究成果は、備前焼の技術によってウガンダ陶芸の高火度焼成への可能性を切り開くことができたことにある。高火度焼成によって得られる堅牢な陶器は、ウガンダの生活を大きく向上させることにつながるという大きな意義をもっている。本研究において、備前焼を手本とした理由は以下のとおりである。第一の理由は、焼成に釉薬を用いないこと、釉薬が作品の表面につきにくいことなどの特徴から、備前焼がウガンダの陶芸作品と外観的に類似していることである。第二の理由は、備前焼の土はウガンダの土と同様、鉄分を多く含むことである。ウガンダの土の方がより多くの鉄分を含むが、高温で焼成した場合、二つの土は極めてよく似た風合いを示す。

備前焼をウガンダの陶芸の手本とするためには、多くの研究を重ねる必要があった。すなわち備前焼の手法をどのように適用するか、どの工程で用いるか、またどのようにウガンダの陶芸の向上に役立てていくかという点について、詳細な検討を加える必要があった。このような理由から、ウガンダの様々な土を入手し、そのミネラルの構成成分の分析を行い、また陶芸作品を制作する際に必要な性質（可塑性、収縮性、吸水性など）や備前焼と同じような高温で焼成した際の耐久性などについての試験を行った。

ウガンダの粘土を用いた初期の実験のほとんどは失敗に終わり、続く実験では備前土と同様の条件の土地、

すなわち稲作地から土を採取した。特にウガンダのKibimbaの水田から採取した粘土は、ウガンダ陶芸の品質を高めるうえで有効であることがわかった。それまで採集したウガンダの粘土には鉄分が多く含まれていた。Kibimba粘土も鉄分が多いが、備前焼の手法を応用することが可能であった。不足していた耐火度の改善には、カオリンを配合することで解決を図った。次段階としてはウガンダのカオリンを研究することが必要とされるが、ウガンダにはBuwambo白色カオリンが存在する。しかしこのカオリンは原土に近いものがあるので精度が足りない。カオリンの粒子や鉄分の除去など、精度を高め、良質なkibimba粘土を作る必要がある。

焼成の実験では、備前焼の粘土は1日間かけてゆっくりと焼成されるが、この焼成方法を採用、実行し、ウガンダKibimba粘土の焼成法に応用できることがわかった。この焼成実験により、野焼きが中心となっているウガンダ陶芸に備前焼のような高火度焼成を応用できる可能性を切り開くことができた。また備前焼のいくつかの手法や方法を取り入れ、本学の穴窯での焼成や電気窯での焼成の際にも応用した。

博士の作品としては、以上の東京藝術大学や備前での研究成果にもとづいた新たな手法のほか、テラ・シギラタなど過去に研究した加飾手法などを応用した作品を提出した。作品にはアフリカの伝統的な衣装の装飾をとり入れ、アフリカの楽器はもちろん、日本の伝統楽器を象ったものとした。楽器というアイデアと分類を使って新しい形、つまりその形を見る人に美意識とともに感情や感性を抱かせ、楽器を奏でた楽しい思い出や、あるいは楽器の音色を聞いた時の心地よい感覚を呼び覚まし、平和と幸福の感情を起こさせることを目的とした。特に制作プロセスのなかで、備前焼を手本とした窯入れから実際の焼成の工程、藁や穀殻を用いて作品の表面に効果や変化を与える装飾の手法は、ウガンダの陶芸にうまく取り込むことができれば、その発展に大きく貢献するものという感触を得ることができた。

以上の研究や制作で得られた研究結果をウガンダ陶芸に応用すれば、高火度焼成で丈夫な、より機能的でモダンな器を生産し、生活の向上を図ることにつながる。今後は本研究にもとづき、水漏れのしない頑丈で洗いやすい生活陶芸、陶彫作品、楽器、陶壁や衛生陶器などを作り出し、ウガンダ陶芸と社会の現状を変える一助とし、ウガンダの生活環境の向上を目指したいと考えている。また一人のアーティストとして、備前焼の加飾技法とアフリカ芸術のハイブリッドによる作品、さらには音楽家など他のアーティストとのコラボレーションなどによって新たな作品を生み出し、ウガンダ陶芸の明日を切り開くことに貢献していきたい。

(論文審査結果の要旨)

ムピンディ・ロナルド・キブデ氏は、はるばるウガンダから日本の陶芸を学びに留学した青年であり、その大志は陶芸の改良による母国の発展にある。本論文は、東京藝術大学をはじめ、岡山県備前での実習など、日本における精力的な研究と制作の成果にもとづき、ウガンダ陶芸の改良に向けた重要な成果が丹念に論じられており、学術論文としてきわめて高い価値をもっている。

第1章では、実技系の論文においては珍しく、丹念にインタビューなどの研究方法が述べられており、好ましいものとなっている。

第2章は、本論文の核となる論点が述べられる。すなわちウガンダ土とよく似た性格をもつ備前焼の装飾や技法の研究によって、ウガンダ陶芸を大きく改良することができる可能性である。ことに陶芸家の眼から、人類学研究より踏み込んだウガンダ陶芸の現状分析がなされている点が評価できる。

第3章は、氏のウガンダや藝大における修士課程の研究、制作が述べられており、博士に至る研究、制作にまつわる思考過程をたどることができ、興味深い論述となっている。

第4章は、博士提出作品について、制作プロセスやコンセプトが論じられている。テラ・シギラタなどの特徴的な技法、ウガンダ粘土の分析、備前をはじめとする様々な窯での高火度焼成の実験など貴重なデータが紹介されている。特に粘土の分析や焼成実験のデータや実験方法は、今後、ウガンダに限らず、高火度焼成の技術を導入していない地域の陶芸の改良研究に大いに役立つものとなる。作品のコンセプトについては、今少しの書き込みが望まれるが、骨子については明快に論じられている。とりわけ楽器がもたらす記憶を呼び起こし、平和と幸福の感情を起こさせることを目的としたという一節は、氏が母国の陶芸の技術的な改良だけでなく、今後、作品によっても人々に大いに希望と感動を与えるであろうことを確信させるものとなっている。

本論文の読了後、多くの読者は、熱心に学び、その成果を自らのものとしていく氏の真摯な姿勢に心を打たれることであろう。その意味で本論文は学術論文ではあるが、実に感動的な一人の作家の「物語」ともなっている。本学は数多くの留学生を受け入れているが、そのあるべき最も理想的な姿勢を示しているという意味で、惜しめない賞賛をおくり、博士学位にふさわしいものと評価したい。

(作品審査結果の要旨)

提出作品「楽器から抽出された形」は、アフリカ、アジアの伝統楽器の形態や機能から発想した十三点の作品構成からなる作品群である。作品はそれぞれインスピレーションの元となる楽器の形態や発音機能の違いによって、異なるコンセプトを持って制作されている。

①Pipe Organ form. (パイプオルガンの形) この作品は、パイプオルガンや日本の古典楽器である笙から着想した長さの違う7本の陶管から出来た壁面作品である。②Percussion Pots. (打楽器の壺) ウドゥ・ドラムから着想を得た3点の組作品である。轆轤と手捻りを組み合わせた同じ成形方法でつくられているが、それぞれに異なる赤土を用い、焼成も薪焼成、匣鉢焼成、炭化焼成と異なる条件で行って、それぞれに特徴を示す見応えのある作品となっている。③Flute like form. (フルートのような形) フルートから着想した作品である。下部を大きく張らせることにより、音の共鳴を良くする効果を狙った様である。バランスのとれた造形的に美しい形態となっている。④Longneck Udu form. (長い首を持つウドゥの形) ウドゥ・ドラムから着想を得た作品である。本来のウドゥ・ドラムの形に長い首を付け加える事による音の変化を確かめる作品であるが、首部を長くする事により形態的な面白みと強さは、この作品群の一翼を引き締めるキーポイントとなっている。⑤Kalimba form. (カリンバの形) カリンバの形を象徴的に表現した作品である。このような方形の作品の成形は板作りや紐作りで行うが、乾燥による割れを防ぐためナイロン繊維を練り込んだ新技法の研究を行った。⑥Drum form (打楽器の形) 太鼓とウドゥ・ドラムから着想した打楽器を模した作品である。⑦String pot. (弦楽器の壺) カラバッシュから着想した形態であるが、パーカッションの機能も持たせたユニークな形と装飾の壺となっている。⑧String form (koto) (弦楽器の形 (琴)) 日本の琴の形から着想した形態であるが、より視覚に訴える形とするため、琴では弦を伸ばすために削られた形をしている部分を、ドーム型の形としている。⑨Bizen Pot (shaker) (備前焼の壺 (シェーカー)) シェーカーを模した壺型の作品である。備前土を用いて轆轤成形し、表面装飾の研究にテラ・シギラタ化粧土を施して、藁で満たした匣鉢に入れ薪窯焼成したものである。⑩String form 1.2 (弦楽器の形 1・2) この作品はアフリカの弦楽器から着想した方形の大作である。同じ様な方形の作品であるが、成形法は異なり一つはタタラを用いた板作りで制作し、片方は型紙を使って紐作りによる成形をしており、どちらも力強い秀作である。

これらの作品は、轆轤成形、手捻り、紐作り、板作り、型紙など多種多様な成形法とテラ・シギラタや色化粧土を施し、表面を磨き上げる技法、搔き落とし、イチチンなどの多くの加飾技法、それに加えて薪焼成、野焼き、楽焼き、匣鉢焼成、炭化還元焼成など博士号に相応しい多彩な能力を示すものである。

(総合審査結果の要旨)

ロナウド・ムピンディ氏の作品は楽器の形態、機能から発想を取り入れた作品である。パイプオルガンや日本の笙の筒状形態の楽器またアジアやアフリカの楽器等から着想を得ている。アジアの楽器、三味線、琴、琵琶といった弦楽器、アフリカの楽器ウドゥ、ドラム等、体鳴、膜鳴、気鳴、弦鳴楽器からインスピレーションを得て製作している。

造形は轆轤と手ひねり、板作りによる方形楽器等を製作した。加飾は燻し焼したがってそれぞれの焼成特徴をあぶりだす楽器を製作した。窯焼成の特徴を捉えた質感、造形表現がされており、非常に魅力のある優れた作品と評価できる。

論文は備前焼焼成に特に力点を置いて書いている。その報告は1週間の丹念な窯詰と11日間に渡る焼成体験によって体験したことによって、無釉の焼締窯の窯詰が非常に重要なウエイトを占めている。また11日間という長期間に渡って焼成せざるを得ない備前の粘土の特質と必然性を理解した。備前焼は窯詰作品の位置、

傾きなど灰被りの完成状態を想像しながら窯の中に作品を詰めていく事によって作品の優劣を左右する事。窯焚きが焼き締め陶器の機能性、実用性を十分に満たし、作品の優劣を決定する。ムピンディ氏は長い時間を掛けてじっくり焼き締めていく重要性に気付いた。その備前焼の伝統的な窯詰、焼成法がウガンダ陶芸を変革し、実用陶器分野のみならず、楽器やインテリア、建築資材、陶磁壁画藝術等の発展に寄与し、助けとなる事を理解した。また、アメリカ・アルフレッド大学で学んだテラシギラタは、遠くギリシャ陶器、南米陶器に見られる。ムピンディ氏は大変興味深い研究をしている。原料試験を通じて、テラシギラタに適應する微細粘土（テラシギラタ）の良質な顔料混合粘土の作成を生み出し、その作成法、塗布量の調整などが実験結果に基づいて詳細に書かれていることは高い評価を与える事が出来る。他の実験ではウガンダ粘土の改良に取り組んでいる。ウガンダ粘土にカオリン粘土を加え、850℃～1280℃までの6段階に分けてその焼成温度、焼成時間変化の収縮率を丹念に計測した結果を発表している。

これらの研究、特に電気窯の酸化、還元雰囲気、薪窯燻化雰囲気、灯油窯による楽焼等の焼成研究は、筆者の今後の作陶藝術に大きな糧となり、ウガンダ陶芸の発展と向上に貢献する研究である。日本での5年間の研究成果が詳細かつ実体験に基づき端々に記載されている。作品・論文共に秀でた内容である。